

文学のふるさと——神戸とその周辺

文学遺跡探訪会



明治書院

父子のふるさと

——神戸とその周辺——

文学遺跡探訪会



明治書院

文学遺跡探訪会
池本貞雄
大西匡輔
塩谷善之
難波昭義
広岡正義
村上千雄
山杉雄

文学のふるさと——神戸とその周辺 1400円

昭和51年6月1日 印刷

© bungakusekitanpohkai

昭和51年6月5日 発行

著者 文学遺跡探訪会

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 大文堂印刷株式会社

代表者 梶原 忠幸



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号101

電話(03)294-5336(代) 振替口座東京3-4991

もくじ

猪名野とその周辺

- 多田神社——戦争放棄した多田源氏
大物の浦——悲話が彩る古代の水門
昆陽寺——猪名野に残る行基の奇蹟
千僧付近——梶井基次郎と伊丹の雲
伊丹と鬼貫——亡き友にささげた俳道開眼の句
広済寺——三か所にある近松門左衛門の墓
西宮えびす——傀儡師のふるさと

芦屋

森狙仙

業平町——伊勢物語ゆかりの地

芦屋のアトリエ——枯木のある風景

芦屋と谷崎潤一郎——『細雪』の舞台

処女塚——万葉乙女の純情を刻んだ碑

会下山遺跡

神戸

敏馬の崎——亡き妻をしのぶ大伴旅人

神戸一中跡——田宮虎彦と『朝鮮ダリヤ』

新川と賀川豊彦——死線を越えた伝道者

熊内——若菜の里に咲いた『天の夕顔』

西灘周辺——飾らぬ魅力を保つバー・アカデミー

生田の森——兄弟愛も秘めた合戦の地

三宮駅付近——青春を葬送する『火垂るの墓』

神戸在住の作家

金星台から——神戸のまちと陳舜臣の魅力

神戸の詩活動

蒼氓の宿——最後の望みを異国に託して

神戸山の手——異国情緒を求めて

外国文学の玄関口——モライスとハーン

元町通り——歴史の通り抜けた往還

六甲山

三 三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

兵庫

兵庫の津——好色一代男遊歴の地

築島寺——築港の人柱となった松王

清盛塚——野望と執念を宿す十三重の塔

薬仙寺——法皇を幽閉した萱の御所

雪見御所——平家榮華の夢の跡

駒つなぎの松——義経の奇略鶉越の坂落とし

忠度塚——最期を飾る武將の風流

願成寺——永遠の愛に生きた小宰相

源平勇士の碑——合戦にみる人間模様

夢野——死を招いた雌鹿の夢占い

遠矢の浜——本間孫四郎遠射の跡

会下山——楠木正成の湊川合戦本陣跡

蓮池跡——池面に映った武將の運命

「兵庫」という地名

須磨

松風村雨堂——行平を慕う汐汲みの姉妹

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二六

須磨の浦——光源氏のわび住まい

一二

須磨寺——木陰に点在する文学碑

一三

須磨寺と放哉——こんなよい月をひとりで見えて寝る

一七

須磨の閑跡——村上帝社と閑守稻荷

二〇

戦の浜——露と消えた敦盛一七歳の命

二三

一の谷——安徳帝内裏跡伝説地

二六

鉄拐山——岩根をはいのぼった芭蕉

二九

子規・虚子の碑——須磨保養院の日々

三三

須磨と藤村・秋声・百三——心の傷を癒しに訪れて

三四

垂水と舞子

山陽電車——労働者の内面をさぐる『美しい女』

三六

平磯燈台——モームの短篇『困ったときの友』

四〇

垂水——志貴皇子の歌にひかれた神西清

四三

舞子——豪商呉錦堂の別荘“移情閣”

四五

顕宗仁賢神社

四七

明石

明石の門——明石によせる万葉人の心

五〇

柿本神社——人麿への信仰

一五

西林寺——荷風をとらえた明石の風光

一五

休天神社——一栄一落是春秋

一五

衝濤館——漱石をもてなした女将の手料理

一六

屏風が浦——遠い海鳴りの日

一六

明石藩主と源氏物語

一六

大久保と大岡昇平——『俘虜記』執筆のころ

一五

淡路島

一七

印南野

日岡御陵——この島に隠びし愛妻

一七

印南野——まぼろしの都浅茅の原

一七

播州平野——出獄の夫を迎えに

一七

高砂——千代を契る相生の松

一七

姫路とその周辺

姫路城——白鷺にやどる怪談奇譚

一八

書写山——和泉式部の歌徳

一八

円教寺——『義経記』にみる若き日の弁慶

一八

龍野——故郷の丘に立つ赤とんぼ碑

龍野と内海信之——隠れた反戦詩人の生涯

室津——遊女発祥の地

浄運寺——脚色されたお夏清十郎の恋

唐荷島——海鹿馬の幻想を生む島

家島——その名にひかれて立ち寄る船人

相生——素足の娘の町

赤穂城——忠臣蔵のふるさと

遊女友君

一六
一五
一七
一〇三
一〇六
一〇
三三
二七
三三

文学遺跡探訪会

池本貞雄
大西匡輔
塩谷善之
難波昭
広岡正義
村上公雄
山下杉雄

猪名野とその周辺

京都から西国に向かうコースに二通りあった。一つは淀川を舟で下り、尼崎市神崎から陸路をとり西宮へ出る。もう一つは山崎・箕面を経て大阪空港の北から猪名野を斜めに横切り、西宮で先のコースと合流して兵庫へ向かう。後者を西国街道といった。猪名野は、猪名川とその西をほぼ並行して流れる武庫川にはさまれ、北摂の山なみに北を限られた平坦な台地で、万葉時代の旅人の感傷をそそった歌枕「猪名の笹原」で知られる。この笹原に大規模な治水灌漑工事を施し、発展のもとを開いたのが僧行基だという。八世紀後半、彼は昆陽池を掘り、昆陽寺を創建した。猪名川上流には源満仲が居を構えた多田荘がある。摂津源氏発祥の地である。猪名川下流は、加茂遺跡・空港A遺跡・田能遺跡など、縄文・弥生時代の遺跡が集中している。猪名寺廃寺跡・伊丹廃寺跡など古代寺院跡もこの流域に多く、奈良時代からのこの地の開化を示している。

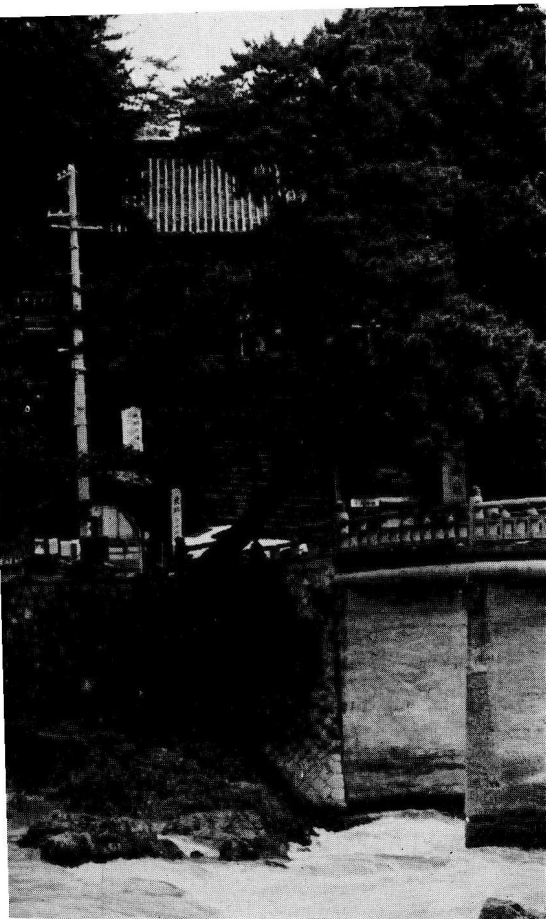
猪名川を下ると淀川に合流し神崎川となる。遊女で知られる江口の里は、この合流点にあった。神崎川の河口一帯は河尻の泊とよばれ繁栄した。西国から送られる荷は、ここから高瀬舟で京へ運んだ。

多田神社——戦争放棄した多田源氏

伊丹市東部を流れる猪名川に沿って北上すると、清流岩を嚙む景勝の地に建てられた多田神社がある。背後の小高い山の緑に朱塗りの社殿が映え、森殿のたたずまいの中に華やかさを滲ませる。この神社は、かつて鷹尾山法華三昧院という寺院であったが、明治維新の際の神仏分離で多田神社と改称した。清和天皇の孫、経基が鎮守府將軍となって源姓を賜わってから、一族は清和源氏を唱えたが、経基の子、満仲は摂津守在任中に川辺郡多田莊（現在川西市）を根拠地とし、晩年にはもっぱらこの地に住んだため、多田満仲と呼ばれた。神社は満仲の館のあとに建てられたもので、猪名川に面した丘陵にあり一見して要害の地を占めていることがわかる。一族郎等は多田の小盆地内に点在し、付近の村落をあわせて七四か村の広大な莊園を形成、さらに近くの多田銀山から金銀を採掘したとも伝えられ、隠然たる勢力をたくわえていた。

満仲の四男河内守頼信は、河内の石川谷を本拠地とする河内源氏の祖となり、二代目三代目の頼義・義家父子を出して源氏の嫡流としての地位を固めたが、摂津源氏とも呼ばれる多田源氏は、剛勇をうたわれた満仲の本拠地であったにもかかわらず、源氏の傍流となってしまう。そのいわれは、『今昔物語』（編者は源隆国という説もあるが不明、一二世紀前半の成立）巻一九からうかがうことができる。

満仲の子の源賢は、比叡山で修行中に父のことが心配でたまらなくなる。武士なら当然のこととはいえ、人を殺す罪障の恐ろしさを少しも省みるところがなく、このままでは来世が案じられる。自分は幸



かつての満仲館あとに建つ多田神社

い僧侶となつて後生ごしょうの大事を知らされ、日々修行に明け暮れているが、父は地獄じごく行ひつじょう必定……救うてだてはないものかとひとり胸をいためた。ちょうどそのころ、高僧が諸国を行脚して説法することになったので、源賢は横川よかわの恵信僧都えしんそうず（のちに『往生要集』を著わした名僧）に、多田荘へ出向き法会を開いてもらえないかと懇願した。事情を聞いて僧都は快諾し、満仲を法会の座につかせるために多田荘へ出向くというのでは素直に応じまい、他の地方の巡錫じゆんしゃくの途中で立寄ったことにしようということになった。源賢を従えて名僧恵信が地方巡錫の途中多田荘へ寄られると聞き硬骨武辺の満仲はいたく感動し、当日はふんだんに名香を焚き、館の内外を掃き清めて塵ひとつない。折角お立ち寄り下さったこの際、ぜひ御仏ごぶつの御慈悲や御法みのりをおきかせいただきたいと満仲の懇請こんぎんがあつて、恵信僧都の説法が行われた。この時僧都の語りかける一言一言は、満仲の心を、時に鋭く刺し貫き、時に優しく慈しみ、仏縁が結ばれていった。

説教の間、時の縁の来たる程にやあり

けむ、守、説経を聞きて音を放ちて泣きぬ。守のみにあらず、館の方の郎等ども、鬼のやうなる心ある兵ども皆泣きぬ。

説経畢ぬれば、守、聖人達の方に詣でて対面して云く「さるべき縁によりて、かく俄に來たり給ひて、限りなき功德を修せしめ給へば、期の來たれるにこそ候ふめれ。年は罷り老いぬ。罪は員も知らず造り積みて候ふ。今は法師になりなむと思ひ給ふるを、今一兩日在して、同じくは仏道に入ればてさせ給へ」といひければ……

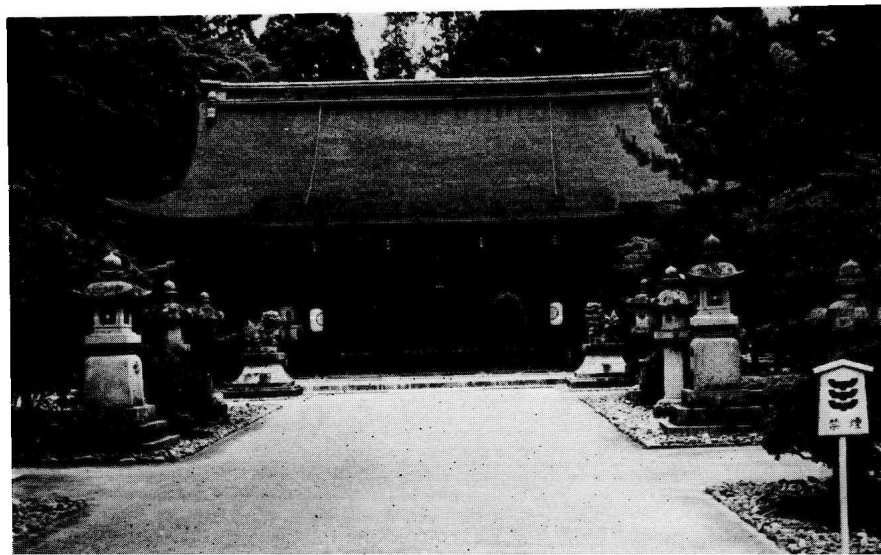
満仲だけでなく、この時、出家発心したものおよそ五〇人、武器を焼き、鷹を放生し、甲冑や弓箭、兵杖を倉から取り出し積み上げて焼いたと記してある。このような軍備放棄が多田源氏傍流化の一因となつたのであらう。

のち、さらに罪障消滅を祈願して一字を建立し供養したとあるが、それが多田院である。拝殿の奥正面には満仲と長男頼光を祀る廟がある。

まんじゅうの御子酒呑み退治たり

満仲を音訓みするとマンジウとなるところから詠まれた古川柳で、もちろん御子は頼光、酒呑みは大江山の酒頼童子のことである。

多田神社拝殿、この奥正面に鳴動の廟がある



廟の横に立札があり「多田院の鳴動」の説明がある。満仲臨終（八六歳）のとき、「身は死すともなほ源氏の道を護り、天下の兇事を鳴動によりて知らせむ」と遺言し、その通りしばしば天下の兇変を廟の鳴動で知らせたという。そこで、朝廷からも勅使を派遣して、国家鎮護の祈願が行われた。その祈願書が宝物殿に保存されている。

大物の浦だいもつ——悲話が彩る古代の水門みなと

大物の浦をたずねて、神崎川の河口に面した見上げるような大防潮堤によじのぼった途端、鼻をつく異臭と、まるで紫色のインクの流れといった水の色に意表をつかれ、恐怖感さえ抱かされる。膨大な尼崎工業地帯が吐き出す毒々しい生活の垢である。こうした光景から古典に思いを馳せようとしても、およそ無理な話であるが、大物の浦はその昔港だっただけに、幾つかの物語に彩られている。

まず、『保元物語』（作者不詳、承久年間三九—三成立）を見ると、保元の乱で戦死した藤原頼長（崇徳上皇方の首領）の次男で琵琶の名手とうたわれた師長が、乱後、土佐へ流される途中、この浦で、京都から慕ってついて来た源惟国に、秘曲「青海」の譜を授けている。

教へおくこの言の葉を偲びなむ身は青海の浪に流れぬ

訣別の歌を残し、帰らぬ船出をする師長は、時に一九歳であったという。

また、『義経記』（作者不詳、室町期成立）の合戦の舞台としても登場する。

梶原景時の讒言ざんげんによつて、数々の武勲をたてたはずの義経は腰越こしごえからは一步も鎌倉へ入れず、真情を縷々と綴った「腰越の申状もうしじやう」も兄頼朝に冷たく扱われ、泣く泣く京へ引返すことになる。ところが土佐坊に命じて追い討ちまでかけてくる頼朝の薄情さに、遂に意を決して大物の浦から西国へ落ちのびることにする。元暦二年（二六六）十一月三日、総勢一万五千騎、義経の乗った五百人乗りの大船月丸を中心にした船団は、まもなく無気味な黒雲に行手を遮られる。平家の武者たちの死霊しりやう怨念おんねんの黒雲である。一度は弁慶の必死の祈禱きとで追い払ったが、再び勢いを盛り返して来て、大暴風雨となつて襲いかかり、ために船団はちりぢりに吹き離されてしまう。

ようやく脱出して浜辺に近づき、小舟を出して探らしてみると、老翁がいて、「判官なら追手が待ち構えているから、早く立ち去れ」という。「ここは何処か」とたずねると、

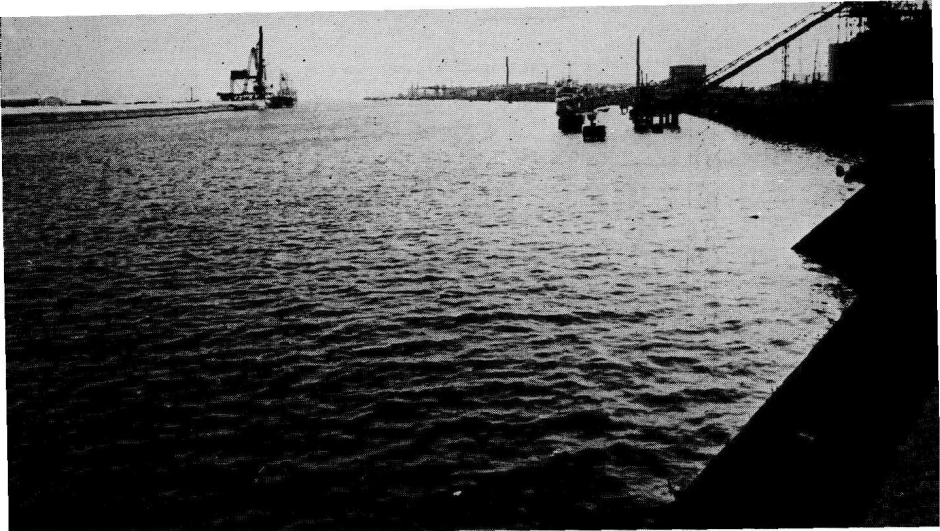
漁火の昔の光灰ほの見えて蘆屋あしやの里に飛ぶ蟹かな

と詠じてその翁の姿はかき消えた。

「天に口無し、人を以て言はせよ」と大物の浦にも騒動す。宵には見えぬ船の、夜の中につきて、苦を取らせず、これぞ怪しけれ。何舟にてある。引寄せて見んとて、五百余騎、三十艘の舟に取乗り押し出す。潮干なれども小船なり、足は浅し、究竟の楫取は乗せたり、思ふ様に漕ぎかけて大船を中に取り籠め洩らすなどぞ罵りける。

この住吉沖の合戦で、寄手の大将豊島冠者てしまのかんじやと上野判官かうづけのはんがんは弓の名手佐藤忠信の矢に射殺される。残念がったのが弁慶と常陸坊海尊で、手柄を立て損じたと嘆くところへ、小溝太郎こみぞのが百騎の手勢で大物へ駆けつけ、浜にあった船五艘に分乗して押し寄せた。その中へ弁慶と海尊の乗った小舟が「疫神の渡るやうに」押し出す。

五艘の真中へすると漕ぎ入れれば、熊手を取つて敵の舟に打貫き、引寄せゆらりと乗り移り、櫓より舳へきぎに



大物浦のあと、神崎川河口

向きて、雍^{なま}打ちにむずめかして、拉^{ひし}ぎ付けてぞ通りける。手に当る者は申すに及ばず、当らぬ者も覚えす知らず海へ飛び入りく亡^なせにけり。

義経一行は、大物の浦から吉野へ向かうことになるが、謡曲『舟弁慶』では、静御前^{しずみづみ}が、ここで義経と別れさせようとするむごい仕打ちは弁慶の計らいに違いないと恨んで泣き崩れる、義経・静御前泣き別れの場面を展開させる。

『東大寺開田図』（東大史料編纂所編）によると、摂津職河辺郡猪名莊絵図に、長洲^{ながすの}浜の西に「大物浜」が記されている。この絵図は一二世紀ごろの製作と推定されるが、長承二年（一二三三）の検注では集落地化していることが記録され、また『中世荘園分布図』をみると、猪名莊から分離して長洲・大物・杭瀬の一带は、平安朝かそれ以前に長洲莊となっている。

僧行基が修築したと伝える五泊（河尻^{かわじり}・大輪田^{おおわだ}・魚住^{うおすま}・韓^{から}・生^{なま}）の東端、河尻^{かわじり}泊は神崎川の河口であったといわれ、このあたりは摂津（港の管理を意味する）から播磨・丹波へつながる要衝の地として発達したものであろう。

治承四年（一一八〇）の福原遷都^{せんと}のときも、六月二日早朝に

京を出立した行幸供奉の一行が、その夜半に大物に到着と『平家物語』に記されていることから、古代の「泊」がしのばれる。

こや 毘陽寺——猪名野に残る行基の奇蹟

伊丹市の北郊にある崑崙山毘陽寺は、ふつう毘陽寺と呼ばれ、山門や観音堂が江戸中期の貴重な建造物として、重要文化財の指定をうけて知られているが、それより僧行基の発願にはじまる寺として古い歴史を留めている。天平五年（七三三）に行基が創建した由来を、『古今著聞集』（橋成季撰、建長六年「三益成立」）卷二「釈教編」には次のように記してある。

行基、諸の病人をたすけんがために、有馬の温泉に向かひ給ふに、武庫山の中に一人の病者臥したり。上人あはれみを垂れて問ひ給ふやう、「汝何によりてかこの山の中にふしたる」病者答へて曰はく「病身を助けんがために温泉へ向かひ侍る。筋力絶え尽きて、前途達しがたくして山中にとどまれる間、粮食あたふるものなくして、漸日数を送れり。願はくは上人あはれみを垂れて身命をたすけ給へ」と申す。上人この詞をききて、彌悲歎の心深し。即ち我食をあたへて、つきそひて養ひ給ふに、病者いはく、「われ、あざやかなる魚肉にあらでは食する事をえず」と。これによりて長洲浜に到りて、なましき魚を求めてこれをすすめ給ふに、「おなじくは、あぢはひを調へてあたへ給へ」と申せば、上人みづから塩梅を和して、その魚味を試みて、あぢはひ調ふる時すすめ給ふに、病者これを服す。かくて日を送る。又、いはく、「わが病、温泉の効験をたのむといへども、忽ちにいえんことかたし。苦痛しばらくも忍びがたし。譬へをとるに物なし。上人の慈悲にあらでは、たれか我をた